世界史の森へ――三谷博先生を送る

村 田 雄 二 郎

三谷さんは国史学科出身だが、いまは日本史家である。より精確に言えば、国史学者から日本史家に変わったのである。この変化の意味は、けっして軽くはない。

三谷さんがすぐれた日本史家であることは、主著『ペリー来航』(2003 年) を挙げれば十分だろう。三谷さんはこの本のなかで、汗牛充棟の資料群を巧みにさばきつつ、欧米諸国のアジア・太平洋政策まで視野に入れながら、近代日本の開国経験を、当事者の心のひだにまで深く分け入って、繊細かつ骨太に描いている。とくに印象的なのは、徳川公儀のさまざまなアクター (将軍、老中、奉行から応接係の役人、通事まで) が西洋船の出現に直面して抱いたはずの恐怖・困惑・逡巡・憤懣・諦めといった内面の葛藤を、実に活き活きと捉えていることである。歴史家の面目躍如がここにはある。

それだけではない。三谷さんの日本史家としての真骨頂は、史実をふまえた上での普遍的な問題提起能力にある、と私は思う。『ペリー来航』の「むすび」の箇所。話が大団円を迎えようという最後の段になって、三谷さんは突然、驚くような問いを読者に投げかける。「1858 年に結ばれた通商条約は本当に不平等条約だったのであろうか」と。不平等というのは、条約改正を前提とした明治政府による後付けの評価であって、当時の受けとめ方とは距離があるというのである。初読の際、私はきわめて重要な問題を含むこの一節を読み飛ばしていた。そのことに気がついたのは、東アジア近代史の領域で「不平等条約」体制論への見直しが提起されたはじめた 5 年ほど前のことである。一本とられた、と感じざるをえなかった。

開国と維新をめぐる日本人の経験を人類文明の普遍的一事象として位置づけようとする三谷さんの志向は、『明治維新を考える』(2006 年) で決定的になった。明治維新の謎 (どういう謎かは該書をご覧あれ) をまくらに、「維新のなかの普遍」で始まる本書は、鎖国から開国への流れをふまえた上で、幕末から明治への変化を説明するために、なんと「複雑系」(カオス) の科学を援用しようとする。まともな実証史家なら絶対に手を出さない領域である。だが、三谷さんはひるむことなく、正面からカオスをめぐる最新研究の理論的洞察に向かい、「維新鳥瞰」の見取り図を描く。その当否を判断する能力は、私にはない。月をさす指の先ではなく、指された月にまなざしを向けるべきであろう。

＊　　＊　　＊

先に、三谷さんは国史学者から日本史家に変わった、と言った。今日、日本史家であ

ることは同時に東アジア史家であることを求められる。そのことに早くから気づき、自らの学問を錬成すべく彫心鏤骨の努力を重ねてきたのも三谷さんである。疑われる向きは、新世紀になって立てつづけに出された三谷さんの編著――『東アジアの公論形成』(04年)、『国境を越える歴史認識――日中対話の試み』(06年)、『東アジア歴史対話』(07年)、『大人のための近現代史19世紀編』(09年)――を見よ。これらはいずれも三谷さんが編集の軸をなし、執筆を先導した東アジア近代史の読本である。こうした「越境」を可能にしたのが、朝鮮史や中国史・台湾史研究との異分野交流に向けての、三谷さんの必死の自己投入であったことは疑いない。そして、それを促したのは、三谷さんが公言するように、駒場における日日の教学経験であった。

教師は学生を育てる。当たり前のことである。だが、教師は学生に育てられもする。これまた当たり前のことである。しかしそこには切磋琢磨がなければならない。幸い三谷さんは多くのすぐれた学生に恵まれたようである。多様な国籍をもつ学生を前にして、「延長戦」を含めて夜遅くまでつづいた大学院の授業は、饒舌な三谷さんをしてますます饒舌にさせたことであろう。長年にわたる多くの学生諸氏との交流のなかでこそ、三谷さんは東アジアに開かれた日本史家に転身しえたのだ。その意味で、三谷さんを送り出すわれわれは、駒場という開放的な教学空間にもっと自信をもっていいように思う。

＊　　＊　　＊

近年の三谷さんは日本史家から脱皮して、さらに世界史家に飛翔しつつあるようだ。最新刊の『愛国・革命・民主――日本史から世界を考える』(2013年)では、副題が示すとおり、世界史のなかに日本の近代の経験を位置づけようとする志向がますます強まっている。トピックは、ナショナリズム、革命の比較、民主化の条件等々、どの頁にも現代世界の諸問題に対する三谷さんのビビッドで切実な関心がうかがわれ、大胆な論断と問題提起で読むものを元気づける。私はこの近作を、三谷さんの30数年にわたる駒場での教学経験の集大成と読んだ。本をいただく際の添え書きには「歴史家というよりは政治学者の仕事というにふさわしいものですが云々」とあったが、謙抑の辞だろう。該書の各処に歴史家としての鋭い叡智が光っているからである。

国史から日本史へ、さらに世界史へ。三谷さんの歴史探究の旅は、ここで一区切りになるとしても、これからもずっとつづくことだろう。

私も三谷ゼミの隠れ「学生」であったことの感謝の念を込めて、とりあえずの別辞を捧げたい。――三谷先生、お疲れ様でした。そして、これからも元気でご活躍下さい！